

インテリア用品のデザイン開発

今西 千恵子 榊原 晴勝 永柳 辰一 山本 紀一

Design of Interior Goods

by

Chieko IMANISHI, Harumasa SAKAKIBARA,
Tatsuichi NAGAYANAGI and Kiichi YAMAMOTO

住みよい環境、心地よい室内など生活空間の充足が求められ、グリーンなど心をうるおすものに対して生活者の要求が高まっている。このため、生活を楽しむ、快適な空間を作り出すインテリア用の鉢や花器のデザイン開発を行った。デザイン設計には3次元CADを活用して、デザインシミュレーションを行い、異素材との組み合わせや新用途を提案したアイテムを検討した。壁面や空間を有効に利用できる鉢として、壁掛け用鉢と吊下げ用のインテリアポット、花器については、洋風の部屋や洋花に合い、また複数の器を組み合わせることにより新しさとおもしろさを出したデザインを意図して試作した。また石や木の自然素材のテクスチャを生かしたデザインを試み、石や木と朱泥容器を組合わせてデスクの上において楽しむ一輪差しの花器や伏差し、文具入れなどのデスクアクセサリー用品をデザインして試作を行った。

1. まえがき

住みよい環境、心地よい室内など生活空間の充足が求められ、グリーンなど心をうるおすものに対して生活者の要求が高まっている。このため、インテリア用の鉢や花器についてデザイン開発を行い、異素材との組み合わせ事例や新しい用途を提案した試作品を作製した。

2. デザイン開発とその背景

快適な空間を作り、心をなごませる物を室内に置くなど生活にうるおいが求められている。なかでも生花や観葉植物を室内に飾ったり、草花や蘭などの鉢ものプラントを贈答用品にすることも増えている。また生活者の花の嗜好も変わってきた。町の花屋には海外から輸入されためずらしい花や栽培技術の進歩による新品種の植物が豊富にあり、手軽に入手できる現況である。

このような背景のもと、花器や植木鉢にも使い方や嗜好の変化に対応した目新しい製品が求められている。そこで「生活を楽しむ、快適な空間を作り出すインテリア製品」をコンセプトに、花器は洋花にも合い、華道、流派にとらわれなく自由に花を生ける器についてデザインを検討した。またインテリア用品として植木鉢にはポットカバーやインテリアポットなどがあるが、今回は壁面に掛けたり、天井から吊るしたりして空間を有効に利用

する新しいタイプの鉢についてデザインを検討した。

3. デザイン設計と製作意図

デザイン設計においては3次元CADを活用して、形状や色彩などについて図のようなデザインシミュレーションを行い、デザインを検討した。以下にアイテムと製作意図を記す。

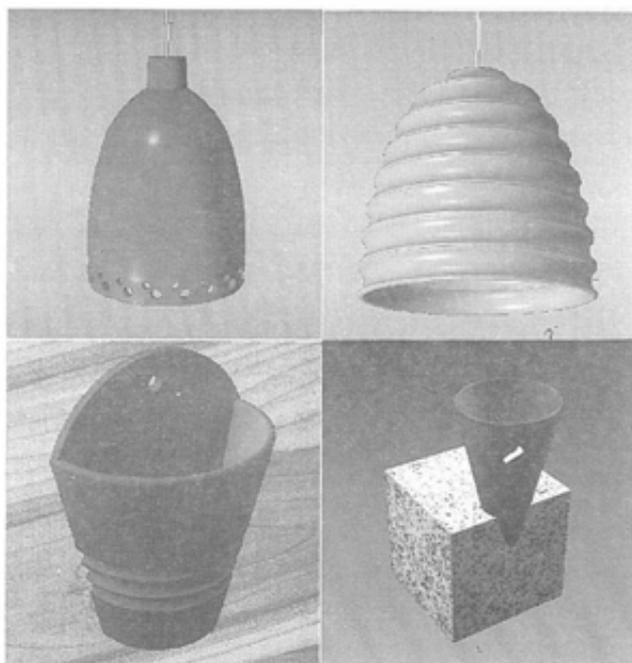


図 デザインシミュレーション

「花器 I」

単品で窓辺や家具の上に置いて洋花を飾ったり、また数個の器を組合わせて置くことにより様々な使用が期待できる花器をデザインした。形状はフリーハンドのなだらかな曲線をもつ変形花器で、花器の口を丸や四角、菱形、不定形などひとつひとつ違った形に切り、遊び心あるデザインを意図した。形は縦長1、横長2の3タイプとし、器の色やパターンを変えてバリエーションをつけた。(写真1、2)

「花器 II」

従来の袋形の花器は花を立てて生けるのに都合のよいように縦長の形が多い。そこで花を横に寝かせて生ける器があってもいいのではないかと考えて、横長の花器をデザインした。たいこ橋をイメージにおき、背を低くして安定感のある形状にした。この器に花を寝かせて生けたり、また吸水スポンジなどの花台を使い、花の丈を短く切って花籠のようにまるく生けたりする。食卓の花器に好適である。(写真3、4)

「吊り鉢」

空間を有効に利用する新しいタイプの鉢をデザインした。この頃では、植物は水耕栽培に代表されるように土なしでも育成できるようになり、土以外の園芸資材も豊富に市販されている。これらの園芸資材と植物を組合せることにより、思いがけない植え方ができる。これは天と地を逆にして植え、植物の向日性を利用して育てる吊り鉢である。使用方法は容器の中にヤシチップや水ごけなどの植込み材料と植物を銅線でききつけて植込み、照明器具のペンダントのように吊り下げて植物を觀賞する。植物はアイビー、ペゴニア、ポトスなどが適している。¹⁾ (写真5～8)

「壁掛け鉢」

住宅の洋風化により、一般家庭の壁がクロス貼りや板張りの大壁となり壁面積が増えている。これらの壁に掛ける鉢をデザインした。室内用のため、小形でシンプルな形状にして内側に釉薬を施し、外側の無釉部分にはステンシルで絵柄を施した。また白や淡青、ページのパステルカラーを施して釉鉢とした。なお鉢や壁掛け花器として使用する他に、はがきや封書などを入れる状差しとしても利用できるようにデザインした。(写真9、10)

「小形花器」

朱泥の器と木や石などの異素材を組合わせて一輪差しの小形の花器をデザインした。自然の木や石をそのまま立方体に切出して、または擬石風の焼物で立方体を作り、これらに朱泥の器をはめ込み、花器とした。キュービクなオブジェとして見ても楽しめる形状を意図した。(写真11～13)

「デスクセット」

自然材を机の上など身近かにおいて利用するため、自然材のもつ素朴なテクスチャを生かして状差しやペン立て、文具入れなどのデスクセットをデザインした。自然石をかたどった擬石や花崗岩のベースと朱泥容器との色と素材感のコントラストのおもしろさをねらった。(写真14～17)

なお、試作に使用した素地、釉薬の調合割合を表1、表2、表3に示す。朱泥花器は1100℃で、鉢ものは1140℃で、釉薬花器は1180℃で焼成した。

4. むすび

生活を楽しむ、快適な空間を作り出すインテリア用の鉢や花器のデザインを3次元CADにより、形状や色彩などをデザインシミュレーションした後、試作を行った。

- (1) 複数で組合わせることにより多様な使い方ができ、洋花に似合う花器をデザインした。形状はフリーハンドのなだらかな曲線と直線で構成した変形花器で、花の生け口や色やパターンを変えてバリエーションをつけた。また壁面に掛けたり、天井から吊るしたりして空間を有効に利用する壁掛け用と吊下げ用のインテリアポットについてデザインと試作を実施した。
- (2) 朱泥の器に木や石などの異素材を組合わせて机の上に置いて楽しむ一輪差しの小形花器や状差し、文具入れなどのデスクセット用品についてデザインと試作を実施した。

文献

- 1) 日本放送出版協会, NHK 趣味の園芸, 7, 50 (1992)

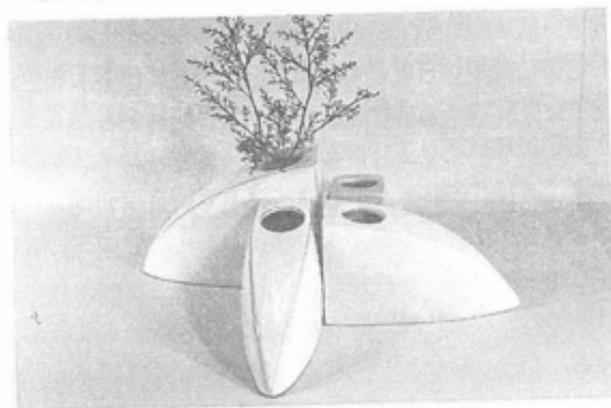


写真1 花器 I

花器 右	W220	×D90	×H125
花器 中	W225	×D95	×H165
花器 左	W150	×D90	×H225

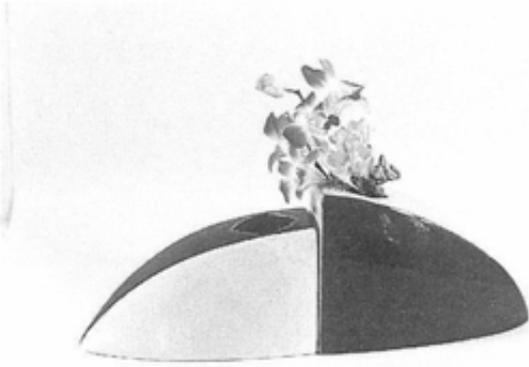


写真2 花器 I
花器 右 W225 × D95 × H165
花器 左 W220 × D90 × H125

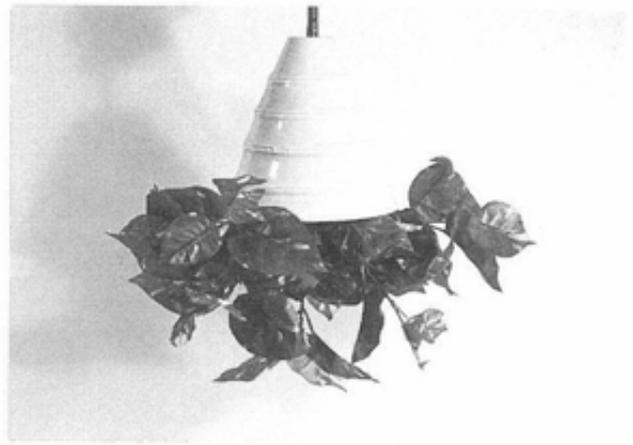


写真5 吊り鉢 A
170φ × H170

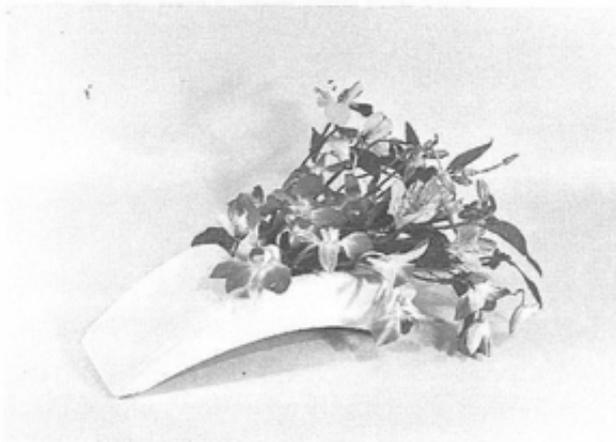


写真3 花器 II
W300 × D140 × H80



写真6 吊り鉢 B
165φ × H165

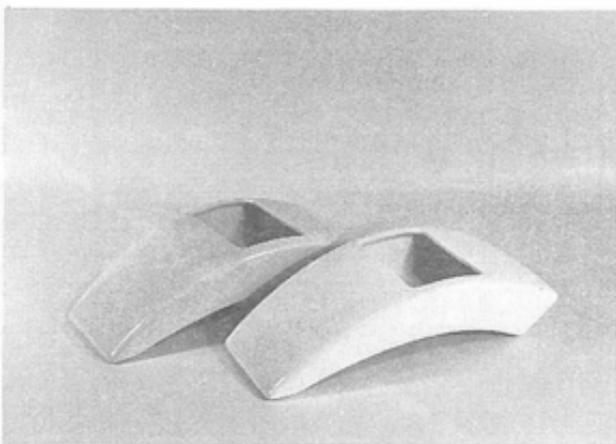


写真4 花器 II
W300 × D140 × H80



写真7 吊り鉢 C
135φ × H135



写真8 吊り鉢 D
300φ×H125

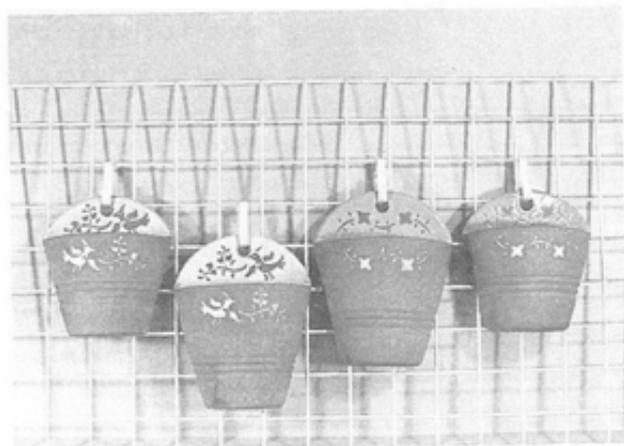


写真9 壁掛け鉢 (ビスク)
A W150 × D65 × H165
B W165 × D70 × H210



写真10 壁掛け鉢 (釉鉢)
A W150 × D65 × H165
B W165 × D70 × H210

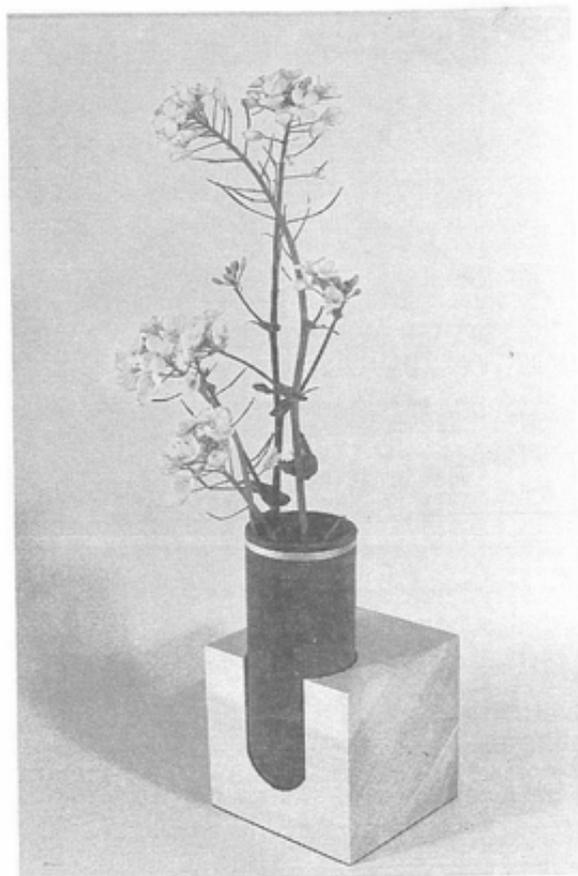


写真11 小形花器 (木)
花器 60φ×H140
立方体 (木) W100×D100×H100



写真12 小形花器 (石)
花器 60φ×H160
立方体 (石) W100×D100×H100



写真13 小形花器（擬石）
花器 60φ×H160
立方体（擬石）W100×D100×H100



写真16 デスクセット（石）
石部分 W145×D85 ×H65
容器 25φ×H105



写真14 デスクセット（擬石）
擬石部分A W175×D85 ×H65
擬石部分B W145×D85 ×H65
容器 25φ×H105

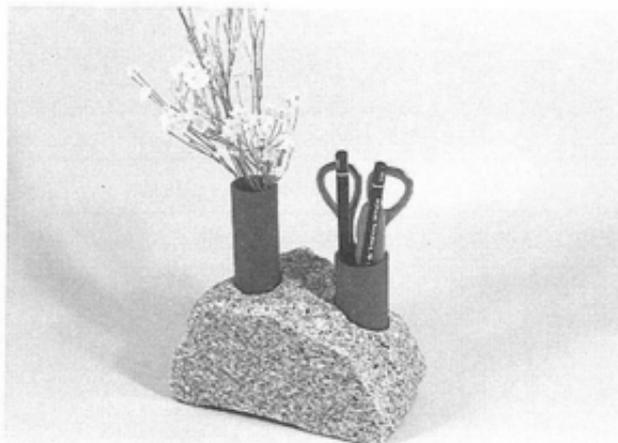


写真15 デスクセット（石）
石部分 W190×D110×H90
容器A 30φ×H135
容器B 25φ×H110

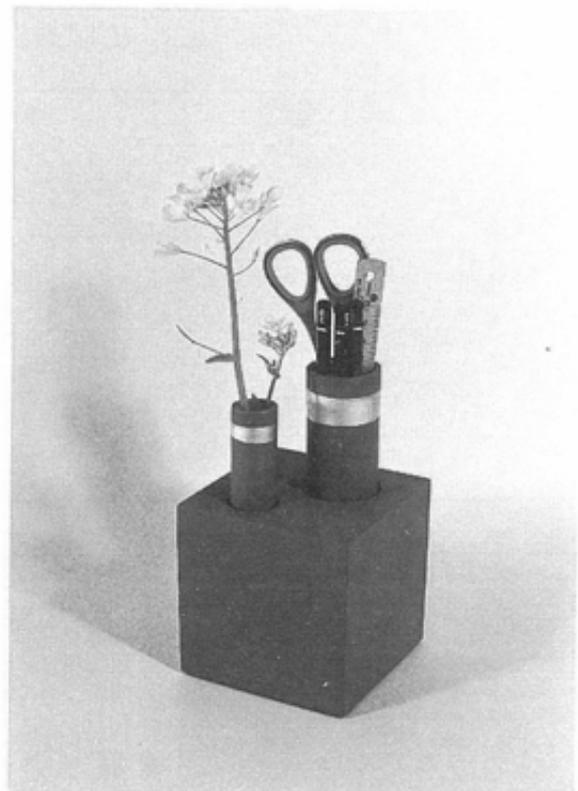


写真17 デスクセット（朱泥）
立方体 W100×D100×H100
容器A 35φ×H135
容器B 25φ×H110

表1 素地の調合割合

(%)

妬器焼込土 (1140°C焼成)		白焼込土 (1180°C焼成)		擬石用焼込土 (1230°C焼成)	
赤8号土*1	42.5	白3号土*1	100	白3号土*1	80
白5号土*1	20.5			花崗閃緑岩	20
白4号土*1	18.5	水ガラス	0.3		
天草陶石	18.5	ソーダ灰	0.1	イルメナイト	1
		有機解こう剤	0.1	塩化コバルト	2
				(無水換算)	
水ガラス	0.3				
有機解こう剤	0.2				

*1 とこなめ焼協同組合製

表2 化粧土の調合割合 (1100°C焼成)

(%)

朱化粧土		茶化粧土	
新粘土長石	45	中国黄土	35
中国黄土	36	弁柄	25
二酸化マンガ	10	村上粘土	10
水酸化第二鉄	9	朱泥土	30
CMC	0.3	水ガラス	0.2
水ガラス	0.3		
有機解こう剤	0.1		

表3 釉薬の調合割合 (1140~1180°C焼成)

(%)

白マット釉		白光沢釉		ページュ光沢釉	
福島長石	52.7	福島長石	50.7	左記の白光沢釉 の基礎釉薬と同じ	
鼠石灰	7.9	鼠石灰	7.7		
タルク	17.5	亜鉛華	7.3		
インドシアリ	8.4	タルク	5.7		
福島珪石	3.3	インドシアリ	8.3		
ジルコン	3.6	福島珪石	10.1		
フリット6305*2	6.6	ジルコン	3.6		
		フリット6305*2	6.6		
酸化チタン	3.0	酸化チタン	7.0	ペルシャコーラル*3	2.0
				M-60濃黄*3	1.5
				H-150 グレー*3	0.5

淡青マット釉		コバルト青光沢釉		緑黄光沢釉	
福島長石	53.2	福島長石	45.5	福島長石	48.0
鼠石灰	3.3	鼠石灰	10.9	鼠石灰	11.5
亜鉛華	3.8	炭酸バリウム	15.8	亜鉛華	6.8
タルク	17.7	インドシアリ	6.5	インドシアリ	7.8
インドシアリ	8.6	福島珪石	11.0	福島珪石	13.0
福島珪石	3.2	ジルコン	3.1	ジルコン	3.3
ジルコン	3.7	フリット6305*2	5.6	フリット6305*2	9.6
フリット6305*2	6.5				
酸化銅	0.4	酸化コバルト	1.5	酸化ニッケル	3.0
酸化コバルト	0.2			酸化チタン	5.0

*2 日本珪瑯釉薬製

*3 日陶産業製